

第24講 「避断定」「責任回避」「推量」が仕事、「助動詞」

ようやく、「助動詞」を学習する段階にきました（これ以前に手を出すのは危険です）

「構造把握」の習得段階を過ぎたら、これからは、「主観的表現」や「解釈が高度に必要とされる場面」の段階へと上がっていきます

そこで、本講では、人間の微妙な思い（主観）を巧みに表現するためにある「助動詞」の「存在意義」「実態」について一気に学習しますので、かなり頭の重労働になると思いますが、とにかく「上位概念」に立ち戻って考えながら頑張ってください

前講でみたように、「作文者」が「断定（断言）しない」「断定（断言）できない」場合すなわち「避断定」「断定回避」「推量」の場合には、主に「助動詞」を使います
実質的には「断定」しないで、発言に対する「責任回避」をすることが主眼でしょう

「避断定」「断定回避」「推量」には、「たぶん」「おそらく」等の「副詞」を使う方法や、『文。』や「動詞」に「～と思う」等をつける方法もありますが、日本語では「動詞」の語尾に、英語では「動詞」の前に「助動詞」をつける方法が主流なのです

本講では、「避断定」を「基本上位（根本）概念」と考え、「推量」を多数の「下位概念」のうちの「代表概念」と捉えて、「助動詞」を考えていきます

「動詞」の「現在形」は、現在の「断定」や現在の「習慣」をあらわすのが原則ということ为前提に、「避断定」「推量」「責任回避」というものを理解してください

「助動詞」の使用場面としては、「推量」「非確信」「想像」「遠慮」「丁寧」「意向」「提案」「勧誘」「意志」「不確定」「不確実」「未定」「未確認」「不明」「習慣」「当然」「未来」「予定」「命令」「義務」「可能」「運命」「忠告」「助言」「必要」「許可」「依頼」「習慣」「祈願」等というような「抽象的な漢熟語」で説明されています

ここでの学習の眼目や仕方ですが、上述のような語群を覚えるのではありません
「避断定（断定回避）」「責任回避」という「根本概念」や「推量」というような「代表概念」で包括的に理解して、実際の『文。』の文脈にしたがって、「避断定」「推量」を機軸に、日本語の具体的な意味をあてがっていく場合の補助手段とするだけです

日本語の具体的な意味としては、「かもしれない」「ありうる」「はずだ」「ちがいない」「だろう」「つもり」「できる」「ならない」「べきである」「してもよい」「ほうがよい」等があげられます（まさに主観的で無責任な表現ですね）

「助動詞」の本質的な仕事は「主観面の表現」で、「避断定」「責任回避」そして「推量」なのです

主観的判断の表現に欠かせない「手段的」な「品詞」が「助動詞」なのです

例えば、「so that構文」での、「that節」に「助動詞」が使われるのも、「目的」をあらわす場合は未確定なので「that節」に「助動詞」がほぼ必要ですが、「結果」をあらわす場合は断定できるので「助動詞」が必ずしも必要ないのです

また、「will」「shall」「would」「sould」も「未来形」等の「時制」の問題と考えるよりも、「避断定」「推量」の問題として考えた方が、包括的で論理的です

「助動詞」の学習の重要な点は、「助動詞」の「存在意義」「実体」を「認識」して考えていくことです

確かに、「構造把握」の観点からは「役外族」ではありますが、人間の思い（主観的判断）をどううまく伝えるかという観点では重要な働きをしていることに注目しながら学習すれば、また違ったものが見えてきて、認識力も深まるかと思います

そして、「助動詞」は、古文の「助動詞」の学習と連動させていくと効果的です
洋の東西や時代を問わず人間の主観的表現はいつでも同じであることを認識しながら、微妙な思い（主観的判断）の伝え方をつかみ取ってください

「助動詞」への考え方のまとめ

①上位（根本）概念

「避断定」「断定回避」（基本概念）、「推量」（代表概念） 「責任回避」（実態）

②作文者の意図

「断定（断言）しない」「断定（断言）できない」「責任回避」

③抽象的な意味内容語

「推量」「非確信」「想像」「遠慮」「丁寧」「意向」「提案」「勧誘」「意志」「不確定」「不確実」「未定」「未確認」「不明」「習慣」「当然」「未来」「予定」「命令」「義務」「可能」「運命」「忠告」「助言」「必要」「許可」「依頼」「習慣」「祈願」等

④日本語の具体的意味

「かもしれない」「ありうる」「はずだ」「ちがいない」「だろう」「つもり」「できる」「ならない」「べきである」「してもよい」「ほうがよい」等、以下、表参照

日本語の意味としては、「逸らす」「はぐらかす」「曖昧」というような主観的表現ともいえます

ここでのコツは、「語彙」「文脈把握力」「論理思考」です

「③抽象的な意味内容語」を「語彙」としてある程度知っていなければなりません
が、丸暗記ではありませんし、ただの丸暗記は無意味です

「文脈把握力」「論理思考」を働かせて、上位の「避断定」「推量」から③を利用して「④具体的意味」へと連想・推測し、そして「文脈的に④を確定」させるのです

「助動詞」は「現在推量」が根源

まずは、「作文者」が作文時に、たとえ「現在の客観的に確定している事実」であっても、「その事実について作文者の未確認や未知」のために、「断定しない、断定できない場合」に、「推し量って」表現するのが、「助動詞」の活躍の根源です

次に、その展開形態として、「過去の事実に関する『過去推量』」があります

以下の表に、「助動詞」の主な意味を掲げておきます（辞書をひいて例文を確認してください）
（無理に覚えようとせずに、例文確認と上位概念から具体的に連動させることに留意してください）

「助動詞」のまとめ（はじめは流し読みが鉄則です）

助動詞単語	意 味（抽象語）
c a n	① ありうる・しうる（可能推量） →「否定形」の「ありえない」⇒「はずがない」（「可能性」がない） ②してもよい（許可）
m a y	①かもしれない（弱い推量）→「c a n」より「弱気」な「推量」 ②してもよい（許可）
m u s t	①ちがいない（強い推量） ②しなければならない（義務的推量→推断）
w i l l	①でしょう、だろう（未定、予定、推量）→（「丁寧・依頼・勧誘」） ②つもり（意思推量）、しようとする（固執）、しようとししない（否定形→拒絶） ⇨ ② 1 ③するものである（習慣・習性） ⇨ ② 2
s h a l l	①でしょう、だろう（未定、予定） ②つもり（意思推量） ③させてあげる（作文者の意図） ⇨ ② 3
w o u l d	「w i l l」の「過去形」といわれているが、それは③以下であって、実態的には、「現在」の「遠慮がちな意思推量」であり、それを「丁寧」といっているにすぎない ①かもしれない、だろう（意思推量）→（「丁寧・依頼・勧誘」） ②だろうになあ、するのになあ（仮定条件文・仮定法） ⇨ ② 4 以上、「現在推量形」

	以下、「過去形」 ③したものだった（過去の非継続的動作習慣） ⇨ ⑤注 ④どうしても～した（過去の固執） ⇨ ⑥注 どうしても～しなかった（否定形→過去の拒絶） ⇨ ⑦注 ⑤時制の一致（「純粹過去形」） ⇨ ⑧注
s h o u l d	「s h a l l」の「過去形」といわれているが、それは⑥のみで、実態的には、「現在」や「未来」への「強い推量」である ①べきであろう（当然） ②はずであろう（強い推量） ⇨ ⑨注 ③べきなのになあ（仮想条件文・仮定法） 以上、「現在推量形」 以下、「特別な用法④⑤」と「過去形⑥」 ④主観的判断、感情表現（「s h o u l d」を省くと、感情面のない単なる事実伝達的になる） ⇨ ⑩注 ⑤仮定法現在（「s h o u l d」を省くと「原形」になる） ⇨ ⑪注 ⑥時制の一致（「純粹過去形」）
c o u l d	「c a n」の「過去形」といわれているが、それは④のみで、実態的には、「現在」の「遠慮がちな可能推量」であり、それを「丁寧」といっているにすぎない 「w a s (w e r e) a b l e t o d o（断定的）」とほぼ同義といわれているが、「断定的なもの」と「助動詞」の「推量的なもの」とは一応峻別すべき ①ありうる（可能推量） ②よろしいでしょうか（許可） ③できるだろうになあ（仮想条件文・仮定法） 以上、「現在推量形」 以下、「過去形」 ④時制の一致（「純粹過去形」）
m i g h t	「m a y」の「過去形」といわれているが、それは④のみで、実態的には、「現在」の「さらに遠慮がちな推量」であり、それを「丁寧」といっているにすぎない ①かもしれない（弱い推量） ②してもよい（許可） ③かもしれないのになあ（仮想条件文・仮定法） 以上、「現在推量形」 以下、「過去形」 ④時制の一致（「純粹過去形」）

n e e d	必要がある（「助動詞」と「動詞」が混在）
d a r e	あえて～する（「助動詞」と「動詞」が混在）
u s e d t o	①したものだ（過去の継続的習慣行動）（「助動詞」と「動詞」 ②～であったものだ（過去の継続的状态）が混在）
h a d b e t t e r	するのがよい

「h a d b e t t e r」「u s e d t o」は、「群助動詞」とでも命名すべき特殊なものです

2語で一単語の「助動詞」と考えるべきものなのです

その特殊性を敷衍（ふえん）して考えると、「h a v e t o」はもちろん「w a n t t o」「l i k e t o」等の定型的な「動詞＋不定詞」は、「u s e d t o」と性質の近い「準助動詞」というように考えたほうが得策と考えます（「第23講」参照）

④1 「w i l l」の「固執」「拒絶」

B o y s w i l l b e b o y s .

「どうしても男の子だな。→ 男の子はやっぱりわんぱくだな。」（「習性」とも解せる）

T h e d o o r w o n ' t o p e n .

「このドアは、どうしても開かない。」

④2 「w i l l」の「習慣」「習性」

H e w i l l s l e e p f o r h o u r s .

「彼は何時間でも寝る。」

A c c i d e n t s w i l l h a p p e n .

「事故は起こるものである。」

O i l w i l l f l o a t o n w a t e r .

「油は水に浮くものだ。」

㊦③ 「二・三人称」の「shall」による「作文者の意図・思惑」

You shall have my books.

「あなたは私の本を持つことになるだろう。」→「あなたに私の本をあげよう。」

He shall die.

「彼は死ぬことになるだろう。」→「彼は、私が死なして（殺して）あげよう。」

作文者の意図が、二・三人称の対称者を中心にした表現であらわされています

㊦④ 「would」の「仮想条件文・仮定法」

「仮想条件文・仮定法」については、次講で学習します

これを、単に「will」の「過去形」というのは実態にそぐわないので、全く別の「助動詞」と考えた方が合理的でしょう

㊦⑤ 「would」の「過去の非継続的動作習慣」

We would often play tennis after lunch
in our school days.

「私たちは、学校に行っていたころ、昼食のあとしばしばテニスをしたものでした。」

①過去時を示す副詞系や「often」を伴うことが通例です

②非継続的な動作を示し、継続的な行動や状態は「used to」を使います

We used to go fishing every morning.

「私たちは毎朝釣りに行ったものだ。」（過去の継続的習慣的行動）

There used to be a tower.

「かつて塔があったものだ。」（過去の継続的状态）

「There is 構文」には、ほとんどの「助動詞」を入れることができます

㊦6 「would」の「過去の固執」

He would insist on going alone.

「彼はどうしても一人で行くと言いつづけた。」

㊦1の「過去形」です

㊦7 「would」の「過去の拒絶」

The door wouldn't shut.

「このドアはどうしても閉まらなかった。」

㊦1の「過去形」です

㊦8 「would」の「時制の一致」

この場合こそが、未来をあらわす「will」の「純粹過去形」といえるでしょう

I know that he will be a doctor.

↓

↓

I knew that he would be a doctor.

「彼」が「医学部の学生」だった頃から時間が経過し「医師」になって「知っている（現在形）」から「知っていた（過去形）」になるように、「主節」が「過去形」になると、「名目的節」の「will」を自動的に「would」に変えなければならない法則を「時制の一致」といいます

㊦9 「should」の「はずであろう（「未来」への強い推量）」

The train should be coming soon.

「電車は間もなく来るはずだろう。」

㊦ 10 「主観的判断」や「感情」をあらわす「s o u l d」

I t i s 主観的判断や感情の形容詞・名詞 t h a t 主 s h o u l d ～ .

作文者が「主観的判断」や「感情」の要素が強いと感じる場合は、評価の対象となっている「真主役の名主節」に「主観的判断」や「感情」をあらわす「s o u l d」を入れます（「真主役の名節」を「とは～」 「なんて～」と訳す）

作文者が「主観的判断・感情の形容詞」を使ったとはいえ、客観性が高いと考えれば「s o u l d」を使用せず、「～ということは」というような通常の「真主語の名主節」として訳します（この場合の「名主節」には通常の「三単現」「過去形」を使う）

I t i s 主観的判断や感情の形容詞・名詞 t h a t 主 「三単現」「過去形」 ～ .

主観的判断をあらわす形容詞

「g o o d」「i m p o r t a n t」「n a t u r a l」「r e a s n a b l e」
「r a t i o n a l」

感情をあらわす形容詞

「s u r p r i s i n g」「s t r a n g e」「o d d」「d i s a p o i n t i n g」

主観的判断や感情をあらわす名詞

「a p i t y」

㊦ 11 「s h o u l d」の「仮定法現在」

「仮定法」については、次講で学習します

ところで、「しなければならない」「べきだ」の強弱ですが、日本語の「べきだ」は強いように感じますが、「s h o u l d」は「推量」「遠慮」の意味の強い「助動詞」ですので、そんなに強い意味を持ってはいません

やはり、「断定の命令文」が強くて、以下のように強弱がいられています

強 「命令文」>「m u s t」>「n e e d t o」>「h a v e t o」>「b e t o」
>「h a d b e t t e r」>「o u g h t t o」>「s h o u l d」> 弱

「助動詞」の「疑問形」「否定形」「否定の短縮形」

以下に、「群助動詞」や、「助動詞」と「動詞」が混在してるものについての、「疑問形」「否定形」「否定短縮形」をあげておきます

辞書で確認するとき等の参考にしてください

need	疑問形	Need 主 do Do [Did] 主 need to do	
	否定形	need not do don't [didn't] need to do	
	否定短縮形	needn't do	
used to	疑問形	Used 主 to do Did 主 use to do	
	否定形	used not to do didn't use to do never used to do	
	否定短縮形	usedn't to do	
ought to	疑問形	Ought 主 (to) do	
	否定形	ought not (to) do	
	否定短縮形	oughtn't (to) do	
had better	否定疑問形	Hadn't 主 better	
	否定形	had better not do	
	否定短縮形	無い	
dare	疑問形	Dare 主 do Do [Did] 主 dare (to) do	
	否定形	dare not do don't [didn't] dare (to) do	
	否定短縮形	使わない	

「dose」は省略しました

「never used to」と「had better not」の位置に注意してください

辞書で例文を確認してください

「過去推量」

「過去の客観的に確定した事実」であったとしても、「作文時」に「作文者」が「未確認」「未知」であったり、「後悔や非難の思い」等から「仮定的」「願望的」な状況を作成・推量（想像）したいがために、「過去の事実に関する推量」が存在します

（「単純な過去の事実に関する推量」と「後悔」「非難」等を含む場合があることに留意してください）

以下の表に、主な「過去推量（「助動詞」＋「have」＋「完了分詞」）」を掲げます

「過去推量」（「助動詞」＋「have」＋「完了分詞」）

① 「can」「could」

「can't have 完了分詞」

～したはずがない、～だったはずがない

「can have 完了分詞」（～したかもしれない）は、通常「could have 完了分詞」を使う

「could have 完了分詞」

～したかもしれない、～だったかもしれない

「couldn't have 完了分詞」

～したはずがない、～だったはずがない（「can't have」とほとんど違いはない）

② 「may」「might」

「may have 完了分詞」

～したかもしれない、～してしまっているかもしれない、
～だったかもしれない

「might have 完了分詞」

～してしまっただけかもしれない、～だったかもしれない

「might」には「実現していなかった」「遠慮がち」で「確信度が低い」意味合いがある程度で、ほとんど差はないとみてよい

③ 「must」

「must have 完了分詞」

～したにちがいない、～であったにちがいない

「否定」は意味的に「can't have 完了分詞」となる

④ 「should」「ought to」

「should have 完了分詞」

～すべきだったのに（しなかった）（非難・後悔）

～したはずだろう（当然）

～してしまっているべきである（完了）

「ought to have 完了分詞」もほぼ同義とみてよい

⑤ 「need」

「need not have 完了分詞」

～する必要がなかったのに（してしまった）（非難・後悔）

上の表の例文をいくつかあげますが、詳しく見てみると、「事実を知っているのかどうか」というややこしい観点があります（この点を認識しながら、辞書での例文確認をしてください）

次講で詳しく学習する「仮想条件提示文（仮定法）」への足掛かりですので、理解するように頑張ってください（例文は、上記の表の番号と一致しますが、順番に注意！）

② H e m u s t h a v e b e e n s l e e p y .

「彼は眠かったにちがいない。」 → ここでは、事実を知らない（事実に関する推量）

③ H e m i g h t h a v e g o n e h o m e a l r e d y .

「彼はすでに帰宅してしまったのかもしれない。」 → 事実を知らない（同上）

① H e c o u l d h a v e b e e n r i g h t .

「彼は正しかったのかもしれない。」 → ここには、過去の事実の判断への迷いがある

ここでは、事実の知不知が問題となっているのではなく、知っている事実に対する評価に迷いがある場合の表現です（「評価」に関する「推量」）

④ H e s h o u l d h a v e f i n i s h e d h i s h o m e w o r k .

「彼は、宿題を終わらせるべきだったのに（しなかった）。」

ここでは、宿題をしていないという事実を知ったうえで、（他人の）過去の行動（事実）への非難・遺憾の思い（評価）を示しています
「もし、できたのならば」という「假定仮想の条件」の思いが裏にはあるのです（次講の「仮想条件提示文」や次ページを参照してください）

以下、「次講」への橋渡しです（読み流して、「次講」へ進んでください）

「推量」から「仮想条件文」（仮定法）へ

推量の形態には、既定事実を知らずに言及する「推量」の段階があり、また別に、現在や過去の事実を知ったうえで、その事実をひっくり返した想定をし、願望・後悔して言及する「仮想条件文」（「仮定法」）の段階があります

それらの中間段階があるのですが（「過去推量」の①④の例文）、まずは、「現在推量」と「過去推量」を確実に理解し、「仮想条件文」への理解を進めてください

知っている事実（現在・過去）について言及する	普通の文（「直説法」） 現在形・過去形
現在の既定事実を知らない（現在未知）うえで言及する	「現在推量」 現在単純条件文
過去の既定事実を知らない（過去不知）うえで言及する	「過去推量」 過去単純条件文
中間形態（「過去推量」の①④の例文）	
現在の既定事実を知っていて、それに反することを仮想し願望する（現在事実転覆）「現在の願望」	現在仮想条件文 （「仮定法過去」）
過去の既定事実を知っていて、それに反することを仮想し後悔する（過去事実転覆）「過去の後悔」	過去仮想条件文 （「仮定法過去完了」）
未来のこと（当然未定事実・当然未知・転覆不可）を想定して言及する	未来形 単純未来条件文 意思未来条件文 未来仮想条件文

「現在の願望」と「過去の後悔」という「思いの形態」を実感してください
「仮定法」といわれている「仮想条件文」がよく理解できるはずですよ

そんなことより、「仮定法」なんてわかりにくい用語を次講以降で駆逐しましょうよ

では、いよいよ最後の次講で、「仮定法」とかいつてるヤツを詳しくみていきましょう（ていうか、やっつけちゃいましょう）

「仮定法は *If* です」なんて無様な状態になりませんように・・・頑張りましょう

ここあたりからは、「純粋な文法論」というよりは、「言語表現と解釈論」となっておりま

第25講 「単純条件提示文」と「仮想条件提示文」

従来、「条件提示表現」の学習の一部を「仮定法」と称して提示されていましたが、
それではみなさんの得心を得られたのでしょうか

「仮定法」という言葉は知っているけど、実際は何なのかがよくわからないのが実態
ではないでしょうか

そもそも、「仮定法」という言葉が解りにくいのです

「仮定法」という言い回しは「動詞」の「使用法」のことなのです

「事実と違う仮定のことをいう場合」の「動詞」の「用法（瑣末な現象）」に「仮定法」と名前をつけて、「仮想条件提示表現」の学習を「仮定法」と銘打ちぶち上げるから判らなくなるのです（ついでに言わせてもらえば、「単純条件提示表現」に関する学習をほとんどすること無しに、「仮想条件提示表現」の学習を押し付けてくるのです）

「仮定法」という学習させようとするのは、実際は、「仮想条件提示」の表現方法についての学習なのです

しかし、殊更に「仮想条件提示表現」だけを学習しても、「単純条件提示表現」を基本とするはずの「条件提示」に関する表現の全体像を認識理解することは困難です
本講では、「条件提示表現」の全体について詳しくみていきます

まずは、「条件提示」という表現の実体は何かを分析・分類し、その文法的規則性
ができる限り論理的に説明すべきなのが本来のやり方でしょう

瑣末な現象に名前をつけて、それを「上位概念」としようとするのが無理なのです

「条件提示の表現法全般の分類・検討」が「統括上位概念」（大きな視点・学習目標
範囲）だと考えます

それでは、これから「仮想条件提示表現」を習得する前提となる「単純条件提示表現」
を含めた「条件提示表現」全体を学習していきますが、「条件提示表現」とはどんなもの
なのかという観点を柱として、まずは、以下に示すいくつかの『「条件」の「根本前
提」』で、「条件提示表現」の全容の認識理解のために、「条件提示表現」の理解の大前
提や全体像を俯瞰（ふかん）してから、「本論」に入っていきます

「本論」といっても、「本論」そのものは、「条件提示表現」の詳細な分類と例文の学
習という技術的なものにすぎませんから、本講では、「根本前提」の認識理解のほうが
絶対的に重要なことをご承知のうえ学習してください

『「条件」の「根本前提」』の段取り

㊦ 「条件提示表現」の認識・理解

I 「副詞系」の確認

II 「条件」の認識

III 「単純条件」と「仮想条件」の認識・理解

「現在の願望」「過去の後悔」「未来への予備・決意」とは

㊧ 「レトリック」と「真意」

㊨ 「条件文」における「真意」の読み取り

㊩ 「条件」と「結論（帰結）」に「真意」

㊪ 「条件内容の実現」の「程度論」

しつこい内容ですが、認識力・解釈力・読解力・社会力の増強のためには必須の理解ですので、頑張ってください

では、『「条件」の「根本前提」』に入ります

㊦ 「条件提示表現」の認識・理解

「条件提示表現」とは、「副詞系」で「条件」を提示し、「主節」でその「結論（帰結）」を提示する表現であり、その「真意」を読み取ることが要求されるものです

「条件提示表現」の学習は、**I**、「副語」「副句」「副節」の「副詞系」を理解・確認し、**II**、「副詞系」のなかの「条件」の概念を認識し、**III**、「単純条件」の認識理解を前提に、「単純条件」と「仮想条件」との本質的相違がわかって初めて「仮想条件」への深入りができるのです（段階を確実に追ってください）

I、「副語」「副句」「副節」の「副詞系」の理解はもう大丈夫ですね（確認）
II、「条件」とは、「成績があがったら、小遣いをあげてあげる」のように、いきなり小遣いがあがるのではなく、「成績があがる」という「副詞的な場面状況が必要」ということである、というのは解かりますね（再認識してください）

Ⅲ、そもそも、「条件」には、「**単純条件**」と「**仮想条件**」があります
そこに、「現在」「過去」「未来」の時間の区分がからめられてきます

「**単純条件**」 → ①「**現在**」②「**過去**」で確定した事実を作文者が知らない場合の条件提示や③「**未来**」の一般的に起こりうることにに関する条件提示です
①「今暇なら、掃除を手伝ってください」
②「昨日彼が学校を休んでいたなら、あの新任教員を見てないよな」
③「明日晴れたら、釣りにいきましょう」（→後述しますが、「**時条副節**」の問題）

「**仮想条件**」 → ④「**現在**」⑤「**過去**」の確定で既知の事実^{④⑤}に反する条件提示（「**反実仮想**」と称されています）や、⑥「**未来**」の起こりえないことを想定する条件提示です（従来、この④⑤⑥を「**仮定法**」と称されて喧伝されてきました）
決まってしまう現実^{④⑤}に反する想定をした条件提示（④⑤）や「**未来**」の通常予想される出来事を逸脱した条件提示（⑥）ということをご認識してください
④「もし、今、私が鳥だったら、あなたを救い出すのになあ」（当然、人間ですね）
⑤「もし、あのとき、その場にいたとすれば、あなたを支援できたのになあ」
⑥「もし、明日、西から太陽が昇ったら、私の全財産をあなたにささげます」

「**仮想条件提示表現**」とは、「**現在**や**過去**のことに関して、現実とは違うこと、既定の事実^{④⑤}に反することを想定し」「**未来**のことに関しては、まず起こりえないことを想定し」、その条件下で「**現在の願望**」「**過去の後悔**」「**未来への予備・決意**」等を表現することです（「**推量**」の意味合いを持つことから「**助動詞**」が使われます）
「現実とは違うこと、決まった事実^{④⑤}に反することを想定」するのは「**副語・副句・副節**」で、「**願望・後悔・予備・決意**」するのは「**主節**」です

ここで確実に認識してほしいのが、④「**現在の願望**」と⑤「**過去の後悔**」に⑥「**未来への予備・決意**」という「**三種の仮想条件**」による「**真意伝達**」の実態内容です
④「**現在の願望**」とは、「今、大金持ちだったなら」というような「**現在の現実（貧乏）**」に反することを「**仮想**」して、何かを「**願望・欲望**」することです
⑤「**過去の後悔**」とは、「あのとき、ちゃんと・・・してたら」というような「**過去の実際の行動や事実**」と「**違う行動や事実**」があれば「**また別のもっとよい現実**」が「**成し遂げられていたり、存在しえたのになあ**」と「**後悔**」することです
⑥「**未来への予備・決意**」とは、「**太陽が燃え尽きたら、地球はどうなるの**」「**西から太陽が昇ったとしたら、あなたの望みを全てかなえます**」というように「**まずは起こりえない未来の条件**」を提示し、「**未来への予備・決意**」を述べることです
このような、基本的な「**三種の仮想条件**」というものを認識して進んでください

弐 「レトリック」と「真意」

次に、「条件提示表現」の深い理解の基礎となる、「**レトリック**」「**修辞（法）**」と「**真意（伝えたいこと・本音）**」について認識していただきたいと思います

主観のかたまりで他人の心情を知るテレパシーのない人間は、自分の思い（真意・本音）をどう伝えたらいいのかという迷いのなかで表現することを強いられています
ストレートに言えば軋轢が生じるかもしれないし、雰囲気崩れるかもしれないし、遠まわしに言えば、真意は伝わらないかもしれないし、浮くかもしれないし等々です
そして、飾り立てたり巧みに表現することを「レトリック」「修辞（法）」といいます（「仮想条件提示表現」は「レトリック」のひとつであり、典型ともいえるものです）

「世の中に絶えて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし」（『在原業平』）

（この世に完全に桜というものがなかったら、いつ咲くとかいつ散るとかあたふたせずに、春の頃はのんびりした心でいられるだろうになあ）

いきなり、古文の「せば～まし」の公式です

「反実仮想」といいますね（レトリックのひとつです）

現実と反することを仮想して、願望や後悔を詠い、感情表現をすることですね

「この世に全く桜というものがなかったら」で、「現実にはありえない条件」をいっています（「反現実の仮想条件」「副節・条件節」）

「春の頃はのんびりした心でいられるだろうになあ」で、「願望」される「結論（帰結）」をいっています（「主節・帰結節」）（散りゆくはかない桜を見ずに済むのです）

「せば＝If」「まし（助動詞）＝would（助動詞）」という感じでしょうか（この実態がつかめるようになるのが本講の目標です）（「助動詞」といえば「推量」ですね）

この世から桜の木が完全になくなることは、まずありえませんね

このように、ありえない前提事実（反現実）を持ち出すのが「仮想条件」です

（英語では、この場合に使う「動詞」の形態を「仮定法」というのです）

作者は本当に桜がなくなってしまうばいなんて思っているのではありませんね

（本当は桜が大好きで、千回万回の春の訪れや常春を望んでいるのかもしれませんが）

桜があると春はそわそわするし、なければ情緒豊かには過ごせないしで、困ったもんだと悩んで詠っているのでしょうか（これが真意で、揺れる心情解釈が古文です）

もっと言うと、毎年来る桜の開花（再会）風散（別離）に思いを寄せているのです
あまりに美しい季節に思い悩み、いっそ無くなってしまうばいとまで愛してるのです
ついでの余談ですが、日本人は近年新参クローンのソメイヨシノごときの開花風散に感動していいのでしょうか（本来の日本古来の桜は、「エドヒガン」「ヤマザクラ」です）

「真意」と「レトリック（修辞）」の関係をおわかりいただけましたでしょうか

参 「条件文」における「真意」の読み取り

さらに、その次は、「条件提示文では、常に『真意』を読みとらなければならない」という任務について考えます（表面的なレトリックに騙されてはいけません）

「条件文」では、『文。』を訳して文面をそのままとればいいものではありません
「何を言わんとしているのか」という『真意』を読み取らなければならないのです
文脈に隠れている「本当の現実」と「理想の状況（願望・後悔）」という作文者の「真意」を汲み取らなければならないのです（「レトリック」に振り回されてはいけません）
特に「仮想条件」においては、「真意」が強烈であり、読み取りが絶対的なのです
例えば、「もし私が鳥だったら、あなたのもとに飛んでいけるのになあ」という字面はどうでもいいのです（「鳥」もどうでもいいので、すぐに飛んで行けば「ロケット」もありです）
「私は鳥ではないので、あなたのもとには飛んでいけません」というような「反対描写」の言い換えも無意味で徒労です（字面をなぞるような形式的言い換えは無駄中の無駄です）
「今はあなたに会えない」という現実と、「あなたにすぐ会いたい」「あなたと24時間いつでも一緒にいたい」という「理想の状況（真意）」を読み取ってください
「率直な真意」を汲み取る「心情解釈」が重要なのです（「あなたが、ダイスキ」を読み取ってください）
「あなたに今すぐ会いたい」という隠れた心情吐露に気づかず、「条件」を使った遠まわしな表現（レトリック・修辞）の表面的なものに惑わされてはなりません
読み取るべきものは、字面ではなくあくまで「作文者の真意」なのです

では、「条件提示表現」について、さらに具体的に詳細に学習していきましょう

「直説法」と「仮定法」（形式的観点）

「直説法」

「仮定」の話ではなく、「事実」をそのまま「事実」として伝えようとするとき、「現在」のことを作文する場合には「現在形の動詞」を使いますし、「過去」のことを作文する場合には「過去形の動詞」を使います

これを「直説法」といいます

「仮定法」

「現実にはありえない話（現実と反すること、反現実）」すなわち「仮想（仮定）の話」を言うときの「動詞」の形を「仮定法」といいますが（例えば、「was」ではなく「were」が使われるということを特徴としています）、実態的に重要なのは、
《「現在の仮想」には「過去形」を使い》、
《「過去の仮想」には「過去完了形」を使い》、
《「未来の仮想」にも「過去形」を使う》
という「時制がひとつ以上ずれている」ということです

「事実提示」か「条件提示」かで、その使われた「動詞」の形を「法」というのですが、瑣末で技術的なことですね（重要なのは、「条件提示表現」の実態です）

四 「条件」と「結論（帰結）」に「真意」（実質的観点）

「条件」

単に事実を伝えるだけのときは「条件」をあげる必要はありませんが（「私は王様です。」「私は王様でした。」となります）、「仮定」「仮想」して作文する場合は、「仮定・仮想する条件」をあげることになります（「条件」からは「真意」を読み取るのは困難です）たとえば、「もし私が王様だったら」というような具合です

これは、「副節」であり「条件」をあらわしています（しつこいですが、「仮定」「仮想」する『文。』が一般的には「仮定法」と思われておりますが、従来の文法説明では、そこでの「動詞の形」が「仮定法」と命名されているのです）（まずは、「条件」概念一般の理解が重要なのであって、「動詞」の使われ方は後の技術的問題です）

「結論（帰結）」と「真意」

で、「もし私が王様だったら」という「仮想」で止まることは通常ありえません
「では、どうするのか」という「結論（帰結）」が必要になります

この「結論」は、「副節」とは別の「主節」で示します（ここが「真意」への端緒です）
例えば、「みんなを幸せにするのになあ」などです（→さらに深い真意として、紛争・貧困・病気等で平和・幸福でない世の中を正したいという理想等があるのです）

実体は、王様であることが主眼ではなく（ある意味どうでもいい）、それを足掛かりに「実行実現したい内容・真意」があるのです（ここが「真意」の読み取りですね）

文法的には、「仮想・条件」を「副節」であらわし、「結論（願望・後悔等）」を「主節」であらわすのです（この「主節」をここでは「帰結節」といいます）（下の例文では、「副節」で「現在の反実仮想」、「主節」で「現在の願望」をあらわしています）
（・・・でも、どうあれ「レトリック」に過ぎませんね・・・）

英語で、「現在の仮想・願望」をあらわす場合、前提条件の「副節」の「動詞」にも「帰結節（主節）」の「助動詞」にも「過去形」を使うのです

形式的には「助動詞の過去形」と言われていますが、実質的には「現在推量形」なのです（実質的な内容を吟味せずに、形式的に「仮定法過去」と喧伝するのも無責任な話ですね）（こういう表面現象だけを捉えて「仮定法」といって何になるのでしょうか）

If I were a king, I would make everyone happy.
「もし今私が王様だったら、みんなを幸せにするだろうになあ。」

ここで興味深いのが、「現在の願望」を表現する「条件節」が、日本語でも、「過去形」のような表現になっているということです（「もし今~だったら」と過去形を使う）
現実と違うことを想定する場合は、現実離れという観点なのか、英語でも日本語でも時制をずらした表現になるのでしょうか

五 「条件内容の実現」の「程度論」

「条件」の実現の程度

「条件」といっても、「実現の程度」は「ゼロ」から「１００」までいろいろあります

「ゼロか１００か、有るか無いか」を「可能性」といい、「ゼロを越えたところから１００未満の細かな段階」（ここでは「１から９９」と考えてください）を「蓋然性（がいぜんせい）」といいます

作文者が、未来のことについて、同じことに関して作文する場合でも、「もしフカヒシを食べるなら」のように「実現はありうるもので、五分五分程度かそれ以上だ」と思えば単なる「単純条件文」を使いますし、「あまりに高価でありえない」と思ったり、「もし私が鳥だったら」のように「全く実現しない（可能性がない）」とか、「もし私が王様だったら」のように「ほとんど実現不可能（蓋然性が低い）」と思えば、「仮想条件」を使うのです

ただ、「鳥」と違い、「王様になる可能性」は人によっては（王位継承権者・王族、革命等）、全くなくはないので、どちらでも作文できるのです

「単純条件」か「仮想条件」かは、「実現の程度に関する思いとその表現」という作文者の選択に委ねられている面もあるのです

ここまでの学習内容は、「条件提示」の表現方法の「根本前提」なのですが、お解かりいただけましたでしょうか

それでは、**「本論」**に入りましょう（あまりに長い「前置き」で申し訳ありませんでした）

では、まずは、日本語で考えてみましょう

はじめに、現在の「単純条件」です

「早とちりのお前が馬鹿なら、鈍い俺は阿呆だな。」

「現在」のことを単純に言っていて、「現在形」を使っていますね（「現在単純条件」）特に、「現在の仮想」や「現在の願望」のような深い「真意」はなさそうですね

英語でも、「単純条件文」では、「現在のことは現在形」で「過去のことは過去形」であらわします（「直説法」）（未来のことについては「副節」に例外があるので後述します）

英語では、「仮想条件文」では、「現在のことは過去形」で「過去のことは過去完了形」であらわします（この動詞の使い方を「仮定法」というのです）

次に、日本語で、「仮想条件」をみてみましょう（「現在・過去・未来」とのからみに注意です）

「もし、今、お前が王様だったら、みんな不幸せになってしまうだろうになあ」

「現在の事実（王様ではない）」に反する「仮想」を「条件」としていますね（「**現在仮想条件**」）（「お前が王様ではないのでみんな幸せだ」と言い換えて意味がありますか）

「王様なら」と「現在形」でもかまいませんが、「現在の仮想」を「過去形」のような「だったら」という表現がよく使われます（日本語でも、「現在の仮想」を「過去形」のような形で言いまわしているんですね）

ここでは、「お前のような人間が王様だったら世の中が滅茶苦茶だな」「お前が王様だなんて絶対ダメだ」という「現在の願望」が「真意」として読み取れますね

「もし、あのとき、私が王様だったら、みんなを救えただろうになあ」

これは、絶対にひっくりかえすことのできない「過去の後悔」をいっています（「**過去仮想条件**」）（「自分ならできたのに」というような絶対的な自信が「真意」なのでしょうか）

「仮に、将来、お前が王様になるとすれば、みんな逃げ出さだろうになあ」

これは、まずありえない「未来の仮想・予備・決意」ですね（「**未来仮想条件**」）

「条件」のまとめ

「単純条件」か「仮想条件」か

「現在・過去の確定した事実を知らない」うえでの条件提示や、未来のありうる範囲内の事象の想定 （「実現は五分五分程度かそれ以上」と思う）	「現在」「過去」「未来」の 単純条件
「現在・過去の確定した事実」に反する条件提示や、未来の「全く実現しない」「ほとんど実現不可能」と思われることの想定	「現在」「過去」「未来」の 仮想条件 （ <i>仮定法</i> ）

「仮想条件」と「とき（現在・過去・未来）」

「現在」の事実に対することを想定する 「現在の反実仮想」と「現在の願望」	現在仮想条件 （ <i>仮定法過去</i> ）
「過去」の事実に対することを想定する 「過去の反実仮想」と「過去の後悔」	過去仮想条件 （ <i>仮定法過去完了</i> ）
「未来」のほぼ起こりえない様々なことを想定する 「未来への仮想」と「予備・決意」	未来仮想条件

以下に、「現在」「過去」の「事実」や「未来」の「こと」に関する「知」「不知」「条件」について、表にまとめてみました

はじめのうちは理解困難かもしれませんが、講末まで読んだあと何度も吟味して、完全理解するようにしてください

(①「現在推量」・②「過去推量」に関しましては、第24講で検討済みです)

事実の知・不知と現在・過去・未来との関係

現在の事実 → 知っているのが原則で、知らない場合の処理が重要

《原則》知っている(既知)(現在時制)	普通の文(「直説法」)
知らない(未知)	①「現在推量」
作文者が知らないことや、断定できない「現在の事実」について、五分五分程度の想定で条件をつける	③「現在単純条件文」
事実をわかってはいるが、「現在の事実」に反する仮想条件をあげて、願望する (「現在の反実仮想(副節)」と「現在の願望(主節)」)	⑦「現在仮想条件文」 (「仮定法過去」)

過去の事実 → 知っているのが原則で、知らない場合の処理が重要

《原則》知っている(既知)(過去時制)	普通の文(「直説法」)
知らない(未知)	②「過去推量」
作文者が知らないことや、断定できない「過去の事実」について、五分五分程度の想定で条件をつける	④「過去単純条件文」
事実をわかってはいるが、「過去の事実」に反する仮想条件をあげて、後悔する (「過去の反実仮想(副節)」と「過去の後悔(主節)」)	⑧「過去仮想条件文」 (「仮定法過去完了」)

未来のこと → 知るよしもないし、事実にも反することもないのが原則

単純に未来のことに言及する(未来時制)(推量的一种)	普通の文(「直説法」)
起こりうる「単純未来」のことに条件をつけて言及する (「時・条、副節」)	⑤「単純未来条件文」
「意思未来」のことに条件をつけて言及する	⑥「意思未来条件文」
「ほぼ起こりえない未来のこと」から「普通に起こりうる未来のこと」を様々想定して言及する	⑨「未来仮想条件文」
未確定なことに関わる特別な表現	⑩「未定内容提示 (「仮定法現在」)

③ 「現在単純条件文」

作文者が知らないか断定できない「現在の事実」について、
五分五分程度の想定で条件をつける

副節（条件節）	主節
I f + 現在形 ,	現在形

I f y o u a r e f r e e , I w a n t y o u t o c l e a n y o u r r o o m .

「もし今あなたが暇なら、私はあなたに自身の部屋を掃除してもらいたい。」

④ 「過去単純条件文」

作文者が知らないか断定できない「過去の事実」について、
五分五分程度の想定で条件をつける

副節（条件節）	主節
I f + 過去形 ,	過去形

I f h e w a s a t t h e s t a t i o n , h e s a w t h e a c c i d e n t .

「もし彼が駅にいたら、彼はその事故を見ていた（だろう）。」

⑤ 「単純未来条件文」

起こることがある程度予想される「単純未来」のことに
関して条件をつける（およそ五分五分の条件の場合）
（明日、晴れるかもしれないし、雨天かもしれないし）

副節（条件節）	主節
I f + 現在形 ,（「時・条、副節」）	未来形（w i l l 等）

I f i t i s f i n e t o m o r r o w , I w i l l t a k e y o u t o t h e b e a c h .

「明日晴れたら、あなたを海岸へ連れていきましょう。」

⑤の例文に関して、注意しなければならないことが2つあります

注意1

「時・条、副節」

「単純未来の時または条件をあらわす副詞節では、未来のことも現在形であらわす」という習慣があります（これは使用者本人たちの習慣ですから、理論的にどうあれ、逆らえません）（略して、「時・条、副節」「時条副節」と本書ではいいます）

「If it will be fine tomorrow,」と言っではいけないのです
日本語でも、「晴れたら」と「過去形」のような「た」を使っています

「晴れるだろうなら」というような「未来形」的な言い方はしませんね

「時・条、副節」には、その他に、「when節」「till節」「until節」に、「群副節詞（群従属接続詞）」の「by the time節」「as soon as節」等があります

（ただ、主語の意思を強調したり、丁寧な依頼をする文では、「If」節に「will」を使ってもよい → ⑥「意思未来条件文」）

注意2

⑤の例文は、通常の場合で、おそらく晴れるという客観的状況と作文者のその認識のもとにあるのです

台風が目前に迫っていて、過去の例ではほぼ100パーセント明日いっぱい暴風雨で晴れることがありえないというような状況下では、ありえない未来のことを想定して言及するのですから（相手をからかう意図なのでしょうか）、⑨「未来仮想条件文」となります

⑥「意思未来条件文」

個人の意思により左右可能なことで「意思未来」のことに条件をつけて言及する

副節（条件節）

If + 未来形（will等） ,

主節

未来形（will等）

If you will [would] wait, I will [would] hire a taxi.

「お待ちいただけるなら、タクシーを頼みます。」

（「would」のほうが丁寧ということで、時間に変わりはありません）

If she will foregive me , I will help her.

「彼女が私を許そうと思うなら、私は彼女を助けます。」

⑦「現在仮想条件文」(「仮定法過去」)

確定した事実をわかってはいるが、「現在の事実」に反する仮想条件をあげて、別の「理想的事態」を「願望」する(「現在の反実仮想」と「現在の願望」)

副節(条件節) → 「現在の反実仮想」	主節 → 「現在の願望」
If + 過去形 ,	「助動詞の過去形」 + 「動詞の原形」
	「would」 ~するのになあ
	「should」 ~すべきなのになあ
	「could」 ~できるのになあ
	「might」 ~かもしれないのになあ

If I were a bird , I would fly to you.

「もし、今、(仮に) 私が鳥だったら、あなたのところへ飛んで行くのになあ。」

⑧「過去仮想条件文」(「仮定法過去完了」)

確定した事実をわかってはいるが、「過去の事実」に反する仮想条件をあげて、「過去の事実」に関して「後悔」する(「過去の反実仮想」と「過去の後悔」)

副節(条件節) → 「過去の反実仮想」	主節 → 「過去の後悔」
If + 過去完了形 ,	「助動詞の過去形」 + 「have」 + 「完了分詞」
	「would have」 ~したのになあ
	「should have」 ~すべきだったのになあ
	「could have」 ~できたのになあ
	「might have」 ~かもしれなかったのになあ

If he had been at the station, he would have seen the accident.

「もしそのとき彼が駅にいたら、その事故を見ていただろうになあ。」

ここで、「副詞系」の原点に戻った注意があります

「主節」が「真意」をあらわし必須のようですが、「条件節」は「場面状況」を設定しているものであって、必須のものではありません

また、「条件節」は「副詞系」のひとつにすぎず、「If 節」は絶対なものではありません(「If 節 = 仮定法」なんて愚の骨頂にのぼりつめませんように・・・)

他の「副詞系」すなわち「If 以外の節」「副句」「副語」で言い換えられたり、挿入や省略されていたり、主語の中に条件的意味が含まれていたり、様々あるのです

以下の英文を参照してください（詳細は、別巻に譲ります）

Suppose you were a king , what would you do ?
But for air , we could not live .
I got up early , otherwiae I could not have seen him .
A Japanese could not say such a thing .

この観点からすると、「条件節」を目印とするのではなく、

もうこれからは、主節に「would」「should」「could」「might」を見つけたら、「仮想条件」を疑ってください
まず、「推量」か「仮想条件」だろうなという「あたりと攻め方」が重要です
「would」「should」「could」「might」こそが、「仮想条件提示表現」といわれるものの「正体」だというぐらいの気持ちでいてください

「would」「should」「could」「might」のいずれかの選択は、願望等の作文者の意思の内容や程度による自由な選択によるものです

⑨ 「未来仮想条件文」

「ほぼ起こりえない未来のこと」から「普通に起こりうること」を様々な想定して言及する

副節（条件節）	主節
If + should , (万一～) 起こりうることの想定	仮定法（時制をずらす）でも 直説法（時制はそのまま）でも可能
If + were to , 実現不可能なことも想定できる（仮に～）	仮定法

「条件節」の「should」「were to」を特徴としています

If there should be any trouble, I would [will] help you.

「万一何か面倒なことがあったら、私はあなたを助けます。」

If a larege earthquake were to happen, I would fly for a moment.

「仮に大地震がおきたら、私はしばらく飛んでいるだろう。」

If the sun were to rise in the west, I would trust you.

「仮に太陽が西から昇ったとしても、私はあなたを信頼するだろう。」

⑩「未定内容提示（仮定法現在）」と「s o u l d」

以下の表にあるような「未定内容をあらわす形容詞」「未定内容に従える他動詞」とともに「t h a t 名節」を使用する場合、「t h a t 名節」の中に「提案・要望」等の意味を伝える「未定内容提示のs o u l d」と命名すべき「s o u l d」を使います

ここで注意しなければならないのが、「s o u l d」が使用されない場合でも、「三単現」「過去形」が適用されず、「原形の動詞」が使われることです（この「未定内容」に関する表現形態は「仮定法現在」といわれていますが、ここでは仮に「未定内容提示」と呼称しておきます）

I t 自 未定内容をあらわす形容詞 t h a t 主 s h o u l d 原形 ~ .

主 未定内容に従える他動詞 t h a t 主 s h o u l d 原形 ~ .

⇒ I t 自 未定内容をあらわす形容詞 t h a t 主 原形 ~ .

⇒ 主 未定内容に従える他動詞 t h a t 主 原形 ~ .

I t i s n e c e s s a r y t h a t h e b e q u i e t .

I s u g g e t e d t h a t h e g o t h e r e . (提案した)

I s u g g e t e d t h a t h e w e n t t h e r e . (示唆した)

最後の例文のように、「t h a t 名節」に「直説法」を使用すると「未定内容提示（仮定法現在）」ではなくなり、意味も変わります

未定内容をあらわす形容詞

「i m p o r t a n t」「n e c e s s a r y」「e s s e n t i a l」等

未定内容に従える他動詞

「a s k」「s u g g e s t」「r e q u i r e」「r e q u e s t」「o r d e r」「i n s i s t」「c o m m a n d」「p r o p o s e」「d e m a n d」等

ここまでを、「入門基礎理論編」とさせていただきます

まずは、「英文法理論」の土台と骨格の構築の重要性がわかりましたでしょうか
「英文の構造」というものはつかめたですね
もう、辞書だけでの独習も可能となったでしょう

これまでで、「論理」で「本質」「実体」「基本構造」等を見極める目がかなり養なわれたものと思います（この点はあらゆる面で有効です）

これからは、「詳細知識的事項」をたくさん吸収し、実践へと向かうのです

「現代文」も「古文」も、このように「文法理論」で読んでいくと深い理解や解釈が可能となると思います（本書の理解を端緒として、「現代文」「古文」の深い読みへと進んでください）

本書を契機に、「論理思考ができる人間」「論理的結論と論理的理由を提示できる社会人」を目指してますます研鑽に励み、人生を飛躍的発展的に変え、「自己 MAX」に少しでも近づいていけるようになっていただければ幸いです

「自己 MAX」への到達を下支えするものは、「認識力」です
本書の読破を通してわかっていただけたものと思います
人は、見ているようでみていない、わかっているようでわかっていないのです
このことが、「英文法」の真の分析を通して認識理解していただけたと思います

みなさん個々人が、様々な分野で、旧来の陋習は当然ながら、あらゆることに疑問を感じ、新たなる合理的な世界を切り拓き提示できるよう頑張ってください

次講以降（別巻を予定）は、「比較」、さらには「名詞構文とやら」「複合関係詞と呼ばれるものと疑問名節の副節化」「t h a t の検討」「a s の検討」「b u t の検討」等や「副節の代用等をはじめとした（瑣末）詳細な知識的事項」に進んでいく予定です

2015年春